



写真は試合終了後、日本チームの挨拶 撮影 筆者

ラグビーワールドカップ

日本対スコットランド 観戦記

感動渦巻く横浜スタジアム 白土芳人

花だより 人だより

— ふみの里から

第15号 2019年11月25日

発行者 中村啓佑

ラグビー観戦記	p.1
秋の紙上展	p.3
秋に読む	p.5
思い出を旅する	p.7
ことばをたどると	p.7
Kin(o)kyo	p.8

10月13日(土)午後9時40分過ぎ、新横浜日産スタジアム2階席。私たち夫婦は6万人の波の中にいました。10・9・8・7... カウントダウンが0になって一呼吸... レフェリーがノーサイドの笛を吹き鳴らした瞬間の、あの万雷の拍手と歓声は今も耳に...

スコットランド先制トライ 「勝つサンド」とビールで小腹を騙して待つこと2時間。7時45分、キックオフ。スコットランドが勢いよく攻めてきます。「絶対勝つ」と気迫溢れるプレー、6分過ぎ日本ゴール前のラックからスクラムハーフのレイドロー(4年前は彼一人にやられた)の絶妙のパス、フィン・ラッセルがタックルに来た流をかわしてほぼ中央にトライ!! コンバージョンキックも決まり7点先行されました。またもレイドローにしてやられるのか...

しかしその後、スコットランドFWの近場勝負に耐えて、日本は徐々に流れをつかむと、やがて16分過ぎ、相手の反則からペナルティーキック(PK)のチャンス到来!キック名手田村選手が狙いますが、いつものようにはいきません。嗚呼ー...

日本反撃開始 今度は相手のキックから。このボールを日本はハーフウェイライン付近でキャッチ、さらにライン際のウイング福岡へ。彼は20m近く前進、そこでタックルを受けながらも内側にボールを返しました。何とそこにもう一人のウイング松島が走り込んでいて、相手ボックスを切り裂いてトライ!!! 日本人ファン総立ちです。コンバージョンキックも決まって同点に。



「ペナルティーゴールの失敗転じて福となりましたね」と、お隣さんとハイタッチ!!!

勢いづいた日本が攻めます。相手の反則でPKを得ると、相手陣の22メートルライン付近から素早くボールをまわし中央付近でラックをつくる、そこから素早く球を出し、5人が素晴らしい繋ぎでプロップ1番稲垣が見事なトライを挙げました。二本目のトライはスクラムで押し勝って得た相手反則がきっかけ。これで14-7と日本リード。

相手の反則から PK そしてトライ その後も何度も攻め込みますがなかなか得点できません。このまま前半が終わるのかと思いはじめた37分過ぎ、日本の圧力に屈した相手の反則でPKのチャンスが来ました。「ここで3点取って10点差で後半へ行けば上出来」なのですが、

田村がまた外しました。落胆もつかの間、ジャパンは相手のドロップキックをキャッチ、パスで運び、あと2人で福岡へボールが渡ると見せるや、福岡自身は勢いよく走り始めます。ボールを持っていたセンターがゴロパンを蹴りました。なんとそのボールがポン・ポン・ポーンと跳ねて走り込んで来た福岡がキャッチ、約20メートル走りきってトライ。21-7とリードして前半終了です。

ハーフタイム。両隣のご夫婦と「このまま勝ってほしい」―「多分勝つでしょう」―「それにしても今日の田村は緊張しているのかなあ」等、話がはずみます。

後半開始早々 あっと驚くプレーがありました。ハーフウェイラインから少し相手側に入った地点で、福岡選手が相手センターからボールをもぎ取って約45メートル独走、またまた！福岡トライ!!!。これで4トライとなり、21点差、一安心...と思いきや...

スコットランド執拗な反撃 スコットランドの反撃が始まります。攻撃のパターンを変えてきたようです。それまでの近場勝負から、ボールを右へ左へ大きく遠く動かし始めました。力で日本のディフェンスを突破するのではなく、日本選手を集めずあちこちに走らせて、ディフェンスに穴が出来ればそこをつくという作戦に変えたと見ました。10分頃ゴール前5メートルのラックから2度目の突進、プロップ3番ウイレム・ペトゥルス・ネルがトライ、ゴールも決まって28-14。その後、何となく！スコットランドが6人も選手交代、キャプテンのレイドロウさえ替えて、残り30分、フレッシュな力で逆転をとという魂胆のよう。案の定、5分間でワントライ、しかも入れた6人はますます氣勢を上げるでしょうから、こりゃエライこっちゃ！残り25分、大変なことになってきた。ひょっとして...



ご存じ、ニュージーランドチームのハカ 撮影 筆者

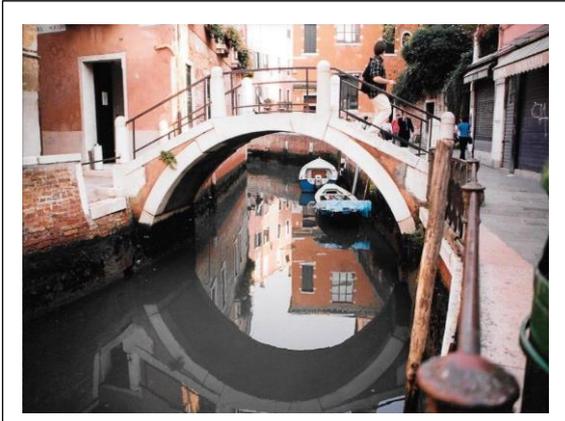
我慢のジャパン、ヒヤヒヤしながらの数分 しかーし、ここからが強かった。ジャパンはゴール前に迫られても相手の新しい作戦に素早く対応してトライを許しません。

プレーが途切れると目は大スクリーンの時計に！「もう5分は過ぎた」と思っても、実際は3分。そんなイライラの繰り返し...

後3分くらいのところで、スクラムが始まりスコットランドはボールを出してはゴールに突進、それをジャパンが押しとどめラック、またスコットランドが突進、またラックで少しずつ、少しずつスコットランドがゴールへ迫ります、その繰り返しの中でジャパンのロック、トンブソン・ルークが孤立した相手を押し返しターンオーバーに成功...ここで日本ボールのスクラムになり、今度は日本が時間を掛けてボールを出しラックを繰り返して右サイドから左サイドへ移動...試合終了のブザーが鳴って、出てきたボールをフルバック山中が蹴り出し、レフェリーがピピピピー！

読者の皆さん、これからも、ラグビーを宜しくお願いします。勝負でなく両チームのゲーム展開を楽しんで下さい。(白土君は、息子さんの手配で6ゲームも見たとか。何て幸せな奴！)

秋の紙上展



ヴェネツィア よくある風景にちょっと一味

竹本道代 イタリアを撮る

竹本さんは、1993年、娘さんの結婚式に参列するため、初めてヨーロッパに一人旅をされました。以来、2014年のフランス、ミディ・ピレネーまで10余年間、カメラを抱えて一人旅。今回、紙上展のために選んでくださったのは、1999年イタリアで撮影されたお気に入りの6点です。



パドヴァの市場。朝早くから音が... 肉屋のおじさんが両手に包丁を持っている。「撮っても良いですか？」—「いいよ」とポーズを決めてくれた。

ヴェネツィアの昼下がり。
このまま遠くへ行ってしまうそう...



海と若い女性



ローマ ふと見上げると
街灯の陰に隠れて...



フェッラーラ 後ろ姿の男
北に行くほど、「いい男」が増えていく気がする。

ヴェネツィアの商館 窓ガラスのブルーが、
寂しげな犬の気持を表しているようで...





秋に読む

高岡厚子・三宅興子・加藤康子

イソップ絵本はどこからきたのか

日英仏文化の環流

三弥井書店 2019年5月

テーマの面白さに惹かれる。多くの人が関心をもっているが、イソップ童話の伝播と拡散があまりにも広く多様だから、誰も手をつけなかったのであろう。

本書の賢明さは、著者たちの専門領域に絞り、さらには、狐と鳥、狐と鶴の二つの話に焦点を合わせたこと。特に興味を惹いたのは、江戸時代中期、頭は動物で体は人間、しかも着物姿、その模様で登場動物の特性に合わせるといふ日本独自の擬人化が指摘されていること。擬人化の問題に興味深々の私は、教えられるところが多かった。

本格的な研究なので、ちょっと手強いところもあるが、日本における受容、イギリスの動物画家の活躍、イソップからラ・フォンテーヌへ、日・英・仏の比較など、多様に展開しているから、自分の好きなテーマを読むのもいいし、各国、各時代の絵本からたくさんのイラストがあるので、それを見て比較するだけでも楽しい。



(イラストは同書3頁、為永春水作、歌川貞重画、1844『絵入教訓近道』から。『絵入り伊曾保物語を読む』より転載)

村田京子

イメージで読み解くフランス文学

近代小説とジェンダー

水声社 2019年8月

村田さんは、これまで19世紀の小説を美術作品と関連づけながらジェンダーの視点から読み直してこられた。今回は、時代の父権的価値観に基づく「女らしさ」「男らしさ」の範疇から外れる人物像の悲劇的運命を論じる。

読むことの遅い私が、あっという間に読み終えたのは、著者の論旨が明快で説得力があるからであろう。特に、ゾラを扱った二つの章に強く興味を惹かれた。第三章では、ゾラは、椿姫に代表される「真の愛によって浄化される娼婦像」の神話から脱却し、社会の解体をもたらす危険な娼婦像を描こうとしたと指摘しつつ、カバネルの「ヴィーナス」やギュスターヴ・モローの作品などとの関係を展開していく。第四章では、ヴィーナスへの視点とは逆に、身体を引き立てる服装が記号となり象徴となることを解き、モードのブルジョワ社会における役割とその仕組みを暴露する。これまでおぼろげに感じていた性と階級の関係について視界の開ける思いがした。

従来から、スペクタクルにおける眼差しの問題には興味があったが、「欲望のまなざし」には思いがいたらなかったし、オスマンのパリ大改造についても、表面的な捉え方をしていたので、教えられる点が多かった。



根川
章子
源氏物語を読みつづけて

ド
ニ
エ
プ
ル
出
版
二
〇
一
九
年
四
月

高校の文芸部で一緒した根川さん。昨年、同窓会で 60 年ぶりに再会。以来メールがはずみ、互いの仕事、源氏物語、平家物語、道行論など文学の話を中心に（パンやチーズの話もありますが）、これまで交わしたメールの字数は、優に 10 万字を超えます（ホントに）。

卒業論文と 40 年後に書いた源氏論二編をまとめて初めてのご出版。非売品なので当編集部にお知らせくだされば、いただけるということです。

第一部 卒業論文 「源氏物語の類型表現について —六条御息所と花散里を中心として—
六条御息所との対面においては、源氏の朝日をあびた華やかな姿が、花散里においては、朧月夜が類型表現となっていることを例証。構成上の問題はあがるが、気迫とエネルギーを感じる青春の文章に圧倒される。

第二部 (一) 「源氏物語余文」 読書会での発表などを経て書かれたもの。卒論で言おうとした技法、技巧をもっと高いところから見渡して、広い意味での小説技法へと発展させようという意図が明瞭になっており、わかりやすさ、説得性が 40 年の歳月を感じさせる。

(二) 「源氏物語私文」 女三宮の出家、玉鬘の巻の衣装など新たなテーマを探りながら、「技法・技巧」は、時には「イメージの繰り返し」、また時には、「場面に寄り添うメロディー」、あるいは「隠し味」と名付けられ、最終的には構想の問題から創作態度の問題へと深まる。

根来眞知子詩集

『雨を見ている』

霽標発行 2019年8月



根来眞知子さんは、文学部同級生。学科が遠い（比喩的に）ので、あまりお話ししたことはなく、控えめな印象しかありませんでした。

何十年ぶりかでお会いして驚いたのは、すべてについて、堂々と発言されるようになっておられること。その大きな変化は、今年一挙にいただいた 3 冊の詩集にも...

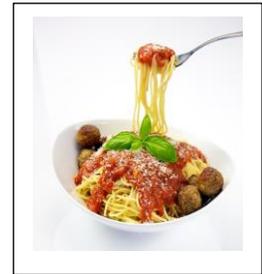
最初の詩集『ささやかな形見』は、1966 年。感性が独特に震えていた。35 年後（2001 年）の『たずね猫』は、生活感覚にあふれ、骨太な根来さんがおられた。それは、「堂々と発言される」根来さんであった。

今年出版の『雨を見ている』。若い頃は、揺れている内面を、今は周りに対峙する自分を詠う。災害のこと、国のこと、遠くのこと、しっかりと向きあっておられる。目をそらしてばかりの自分が恥ずかしい。わかりやすいことばで、てらわず、他者の目を気にせず... それだけにドキッとするのだ。私の好きなのは「ハンミョウ」。幼い日の兄弟喧嘩から...年月を知って...「でも、今ここにいる私は 誰に何に誘われて ここまできたのだろう」 その年月には、しっかりしたものが一杯つまっているに違いない。どの詩も、終わり方が憎い。



一時よくミラノへ行った。特別何があったわけではない。40年も前のことである、飛行機はとても高かったから、パリからイタリア各地へ行こうとすると列車に頼らざるをえない。行く先がローマにせよフィレンツェにせよ、あるいはまたヴェニスにせよ、ミラノに一泊せざるをえないのだ。

夕刻、ホテルの近くのレストランに入った。町によくある、普通のレストランである。「アンティ・パスタ（前菜）→ パスタ」と注文すると、店主はそのまま奥へ行こうとする。呼び止めて「メインを注文するのに」と言うと、不思議そうに「お前たちはまだ食べるのか」とたずねる。「もちろん」と言うと大声で笑い出した。「お前たちのような日本人を見るのは初めてだ」と。



「日本人は入ってきてパスタを食べたら、はいサヨナラと出ていく。それもパスタはスパゲッティと決まっている。だから俺たちは日本人の客を『スパゲッティ・チャオ』と呼んでいる。お前たちは奇特な日本人だ」と誉めてくれた。

その頃、イタリア料理は今ほど日本に浸透しておらず、イタリア料理＝スパゲッティと相場が決まっていたのだ。

もう一つ忘れられないのは、メインのビフテキの大きさ、いや厚さである。数センチはあったか！ミラノのビフテキは、私の思い出の中でだんだんに大きくなっていく。ひょっとしたら、枕くらい... 味は良かったので、私たちはそれを平らげ、ドルチェを食べて、エスプレッソを飲み、また店主を驚かせた。

あの頃に比べれば、私もずいぶん食が細くなった。今度イタリアへ行く機会があれば、私もスパゲッティ・チャオするかもしれない。

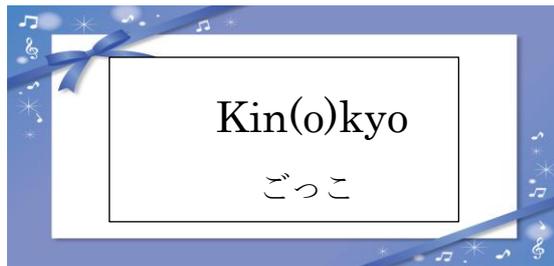
フランス哲学の澤瀉久敬先生は、本の読み方に厳しいことで有名であった。哲学科の大学院生にも容赦なかったから、私たち仏文の学部生数人は緊張のしどおしだった。

今でも思い出すのは、私が読んだときのことである。音読にはかなりの自信をもっていたので、そのまま訳に移ろうとした瞬間、『『エトセトラ』と言いましたね。それは英語です。フランス語は『エトセテラ』です』と、ビシッとおっしゃった。

訳した後、「この一節は、ひとことで言えば、どういうことですか？」という質問も怖かった。モタモタしていると、「もっと短く」が飛んで来る。

要約する訓練は今日に至るまで役に立っている。もちろん「花だより」にも。





* 妻が庭に向かって爪を切っていた。
私は、そっと隣に座った。
「爺さんや、いい日よりじゃのう」と言うので
「そうじゃのう、婆さん」と返した。
「爺さん、婆さんごっこやなー」と言うと、
「ごっこやない。ほんものや」と妻が答えた。
なるほど、と思った。
小春日和の昼下がりのことである。

* 朝早くから、こどもの声が賑やかだ。
「あれ！日曜でもないのに」と思ったら、
即位の日で学校は休みとか。

下に降りてくると、妻がひとしきり感心している。どうしたのかと尋ねると、前で遊んでいる S さんのお嬢ちゃんが弟に向かって、「お姉ちゃんは無敵よ！」と言ったとか。

「私もあんなこと言うてみたかったなー」と羨ましそうである。

「そやけど、あんた、家の中では無敵やで...」と、こころの中でつぶやいた。

* 人事は動くときには動くもの。あれほど難渋していた編集員募集、あっという間に、しかも、ほとんど同時にお二人が決まった。

お一人は、大学の同窓、と言っても、私よりははるかにお若く、現役のフランス語の先生。



もうお一人は、本紙第 4 号に登場した Mme K. 覚えておられるであろうか。むかし、ラジオ講座を聞いてくださったのがご縁でお近づきになったご婦人である。こちらフランス語大好き人間だから、うっかりするとフランス語色が強くなりそう。読者 100 人強とはいえ、公器(?)であるからには、偏らないように気をつけねば。

以下お二人からのご挨拶である(就任順)。

— 「ふみのさと便り」、「花だより」の愛読者から、このたび編集にほんの少しだけ携わることになった井上直子です。紙面作りの舞台裏を楽しませてもらうつもりでいます。どうぞよろしく願います。

— 「経験不問」なら、パソコンに不慣れな私でもお手伝いできるかな、と手を挙げました。亀崎淑江と申します。よろしく願いいたします。編集を通じフランス語も教えていただけると期待しています。

* 久しぶりに本のコーナーを設け、今年頂戴した 4 冊を紹介した。くくりは文学だが、時代的にも地域的にも広がりのあるもの、フランス文学、国文学、詩集とバラエティに富んでいる。研究にせよ創作にせよ、いずれも著者たちの生き様が文章に反映していて読みごたえ十分。

* トップにはラグビーワールドカップ、話題の一戦を再現した。白土君が 6 試合も見たと聞いたからお願いした。中学 3 年の正月、寒い寒い日であった。親友と花園ラグビー場へ見に行った。高校体育の時間にはラグビーの真似事をした。などなどを思い出し、今年はこころが躍った。